



序文

近年、眼科領域も細分化が進み、ますます専門性に特化していく傾向にあります。各分野の発展は目覚ましく、新しい検査機器の登場による診断技術の進歩や、革新的な手術機器の登場、さらにはますます進化する術式や新薬の開発など、国内外の学会ではわくわくするような情報が目白押しです。

しかしながら、日々の臨床においては、最先端の治療をもってしか治せない患者さんばかりが受診されるわけではなく、一般的な疾患の患者さんも多く受診されますし、自分の専門や得意な疾患だけを診察すればよいというわけでもありません。また、緊急疾患はいつでもやってくる可能性がありますし、「私、やったことがなくて、それ苦手だから診ません」ということも通用しません。とはいっても、あまり経験のない疾患や、昔、大学で上級医と一度だけやったことがあるような処置を、クリニックや病院において1人で対応するのはやはり不安を抱きます。

本増刊号を読まれる多くの方は、眼科専門医または眼科専門医志向者（専攻医）でいらっしゃると思います。眼科専門医を取得するためには、眼科全般にわたって一通りの知識および経験を身につけることが必要です。今年（2023年）の眼科専門医試験の口頭試問には、「霰粒腫切開」の問題が出されました。受験生の先生方は皆さん良く勉強しておられ、多くの方が正解されていましたが、知識はあり合格はしたが一度も霰粒腫切開をやったことがない先生方も散見されました。やはり、一度でも見たり経験したりすることは大切です。若い先生方は、積極的に経験を積むようにしましょう。もちろん、知識や経験が未熟な状態でいきなり難しい処置を行ってはいけません。ただ、いつ患者さんが来ても対応できるように、少なくとも理論武装をしておくことは大切です。そのためには、日ごろから積極的に知識のアップデートを行ってください。

本増刊号では、眼科におけるさまざまな処置や小手術について、「疾患・治療法の概要」「手技・治療法の実際」「起こりがちなトラブルと対処法」という項目に分けて、各分野のエキスパートの先生方にわかりやすくご執筆いただきました。可及的速やかに対応が必要な疾患についても記載されていますし、さらには、ご自分ではしなくても、知っておくべき新しい治療法についても解説されています。これから新しい治療を始めようと考えている読者の先生方にとって、本増刊号がそのきっかけとなってもらえると嬉しいですし、ご自分で始めなくても、患者さんに「このような新しい治療もあるけど、どうでしょうか」とご説明できるようになってもらいたいと思います。

堀 裕一（東邦大学医療センター大森病院）